

特定非営利活動法人
柔道教育ソリダリティー

記念講演会

演者 当法人顧問

トヨタ自動車株式会社

前会長・現取締役相談役

奥田 碩氏

2006年12月19日(火)

於東海大学校友会館

ご紹介頂きました奥田です。山下さんが理事長を務められておりますNPO法人柔道教育ソリダリティーの設立を心からお祝い申し上げます。

この法人は、柔道を通じて国際理解と子どもの健全育成を図るということを目的に、半年前に設立されました。私は、大いに賛同し講演を引き受けました。本日は、柔道に関連して、最近考えておりますことを、お話ししたいと思っております。

柔道との関わり

私自身と柔道の関わりですが、12歳の頃に柔道を始め大学までやりました。若い時には講道館にも通いました。私の青春は本当に柔道と書物であったと思います。私は、その二つから大変貴重なものを学びました。柔道において試合に勝つということは大変なことではありません。けれども、それは本当の目的ではなく、一人一人が練習を通じて心技体を鍛

えること、これが目的であると理解しております。

強いものが弱いものを助けなければならぬ、自分の強さをむやみに誇示してはならない。そして、敗者に対して哀れみの心を持つ。「ここぞ」という時には死んでもよい覚悟でやる。こういったことを自然に学んだと思います。

こうした教訓は、新渡戸稲造先生が「武士道」という本の中で、基本的な考え方を書かれております。柔道は武士道そのものであると思います。そんな私に最も影響を与えたのが富田常雄の「姿三四郎」であったというのは、当然の成り行きであったと思います。

当時の若者たちの多くは、「姿三四郎」に夢中になりました。そこには「男は男」「女は女」の世界がありました。多くの若者が「姿三四郎」を読んで、自分の人格を作り上げたと思います。三四郎を通して日本人としての、当時の理想の男性像が生き生きと書かれていました。

山下さんとの出会い

山下さんとの出会いは2004年4月の日露賢人会議の時でした。日本側の座長は森元総理、ロシア側の座長はモスクワ市長のルシコフさんで両国から5、6分づつ、日ロ関係や問題点について話し、プーチン大統領を表敬訪問しました。その時、大統領は一番初めに両手で

山下さんを抱きしめまして、柔道の話で盛り上がったのを覚えております。山下さんとプーチンさんは、非常に良い関係でして、プーチンさんは、柔道を非常に理解している方だと思います。その時、山下さんは「自分の理想は柔道を通じて日本人の武士道、侍の精神的要素を世界に広げること」と話されました。私はこれ聞きまして、深く感銘いたしました。

世界各国それぞれ独自の格闘技がありますが、そうした中で柔道が世界で唯一の存在とされているのは、技術以上にその精神にあるのではないかと思えます。私が即座に思い浮かべたのが「姿三四郎」でした。そこで「姿三四郎」を英訳して、世界に広げれば良いのではないかといいことを、山下さんに話したのを覚えております。山下さんと武士道や柔道について時間の経つのも忘れて話しましたが、それは大変有意義なものでした。

グローバル化の潮流の中で

現在の世界の動きを見ると先進国の少子高齢化、途上国における人口増加の問題など色々な潮流がありますが、一番大きいものがグローバル化だと思えます。ヒト・モノ・カネ・情報が瞬時に国境を越えて移動する時代でブラジル、ロシア、インド、中国のような国土や人口な

ど非常に巨大で潜在力を持つ国々の工業化が進展し、グローバル化はますます激しさを増しています。グローバル化の中では、世界を視野に入れ変化を機敏に捉え常に他者より一歩先んじて行くということが重要だと思えます。しかし、単に競争に勝つということではなく、国、企業、個人、それぞれのレベルで、「海外のヒト・モノと国内のヒト・モノとを区別せず同じ基準でものを見る」という「心のグローバル化」が非常に重要だと思っております。

わが国の企業レベルでは、各国の市場変化に素早く対応出来るように、早い段階から海外に事務所を開き、現地従業員を雇用するなどビジネス活動を通じて現地経済への還元をすると同時に社会貢献活動などにも取り組み、その国の一員として根を下ろすことをやってきたと思えます。しかし、日本社会のグローバル化への対応という点では、不十分だと思えます。例えば外国人労働者の受入に関して2004年の日本で働く外国人労働者は、約60万人です。これは、割合がわずか1%ということで、米国の15%、ドイツの9%と比べ先進国の中では大変低いのです。

日本とフィリピンの経済連携協定(EPA)は、フィリピンの看護士や介護福祉士の受け入れも入っており、わが国が締結したものである。画期的なものであります。しかし、2年間で日本がフィ

リビンから受け入れる人数は看護分野

400人、介護福祉分野で600人に留まりました。この数は、充分とは言えませんが、私はフリービンのとある会議に

加して話を聞いていたのですが、当初日本は100人を提案していました。それを聞き、フリービン大統領は「わが国の看護士、介護福祉士は世界中で活躍している。日本はそれを知っているのか」と怒りまして、会議が一時中断しました。

その後、法務省や入管は受入数を増やしました。非常に難しいことではありますが、私はこれを契機に、この議論が活発化することを期待したいと思います。

また、日本の観光客の受入は、年間670万人で、世界30位くらいです。世界の観光大国を見ますと、フランスは7500万人、スペイン5300万人、アメリカ4600万人、イタリア3700万人と一桁違っておりません。

日本は世界第二位の経済大国となりました。そこで「バックスジャポニカ時代」があっても不思議ではなかったと思うのですが、ついにこのような時代は来ませんでしたが、バックス・ブリタニカ、バックス・アメリカナ時代のイギリスやアメリカのように「世界の人々がその国に住みたい、アメリカ人やイギリス人のような生活をした」と思うような、世界から尊敬される国、世界の人々の模範になっている国とは言い難い状況です。

これがわが国のグローバル化の現状ではないかと思えます。

グローバル化への対応と武士道的心

日本社会のグローバル化ということ

でスポーツが果たす役割には大きなものがあると思えます。大リーグで活躍している松井、イチロー選手などの野球選手や中田、中村選手をはじめとするサッカー選手のヨーロッパでの活躍などが顕著な例として挙げられ、日本人のメンタリティーに大きな影響を与えています。彼らは自分のフィールドを狭い国内で考えるのではなく国際的視野で世界の頂点をめざす。その能力を国際的に通用するレベルまで高め、世界の舞台で活躍し、まさに個人レベルでグローバル化しております。これは、とかく狭い視野になりがちな日本人の精神を海外に向けてさせていると思っております。

スポーツ競技のグローバル化を申し上げましたが、この点を柔道に関してお話しします。小説「姿三四郎」の中で、矢野正五郎の一番弟子の戸田雄次郎が世界に柔道を広めに行く決意を語るシーンがあります。社会背景としては、欧米政策の真只中であり、日本の伝統、特に野蛮な武道や柔術をやめようとしている時代でした。そんな時代に国際化というものを実際に予見していた日本人がいたわけです。戸田雄次郎のモデルは富田常雄の父親の富田常次郎であると

言われています。常次郎は常雄が生まれるとすぐに、アメリカのシアトルへ柔道の海外普及のために渡っており、この時代に、そのような志を持った日本人がいたことは珍しく、尊敬すべきことでもあります。

グローバル化と「武士道」は、相通するものがあると思えます。現在、国際柔道連盟(IJF)に加盟している国は195カ国であります。これは陸上競技、サッカーなどに次いで多く、日本で生まれた競技でこれだけ普及しているものは他にありません。柔道がこれだけ普及したのは、技術が優れていることはもちろんですが、技術以上にその精神、つまり「武士道精神」にあるのではないかと考えております。

武士道において最も重要なことは「義」、即ち「正々堂々」として、卑怯なことではない。「勇」即ち「正義を貫くためには命がけでも思い切って行動する」、逆に正義に反することであれば、それをじっとこらえて我慢する」さらに「惻隠の情」、即ち「目には見えない気持ちや思いやりを同情する」という精神であります。

現在では、グローバル化の影の部分もはつきりしてきたのではないかと考えます。先進国と発展途上国、持てる国と持たざる国、民族や宗教観の対立、こういったグローバル化の影の部分が表に出て来ました。国のレベルだけでなく、会社と会社との関係、個人と個人との関係

を上手くやっていくことが、二十一世紀の人類にとっての大きな課題だと思えます。そして、グローバルゼーションの影の部分を解決していくには「武士道精神」が重要だと思えます。

武士道精神のうち「惻隠の情」は、グローバル化が進むにあたって、日本がこれを発信することが重要だと思えます。台湾の前総統、李登輝さんが書かれた「武士道問題」という本は、日本の武士道精神が現在の国際情勢の中でいかに重要な価値を持つかに触れています。その中で、李さんは「惻隠の情」について触れ、相手の心を思いやれるような深い愛情に裏打ちされた思いやりの心、これが重要であると書いております。

高度成長期に日本からアジアに多くの企業が進出しました。70年代、私は7年間フリービンのマニラに赴任しました。そこで私が感じたのは、日本人はアジアの人々に対して優越感を持っている人が多いということでした。現地地帯にいてはいる人は貧しいとか、労働意欲が少ないとか、このような差別意識を持っている日本人が多かったように思います。私は、これが嫌なことだと思いつつ毎日を通じていきました。日本人はフリービンの社員に対して、目を離すと仕事をしないのではないかと等、疑いの目で見ている傾向がありました。

しかし、今思い返してみれば、日本もエアコンが無かった時代、7月や8月は

役所や会社も生産性が落ちて皆ステコ姿で扇子を片手に仕事をしていました。こんな時代が日本にもあったのです。フィリピンでは夏の気温が一年中続くわけです。現地の社員は家に帰ってもよく眠れない。子どもが多いので狭い部屋でザコ寝です。一方、日本人社員はエアコンの中で生活する。家に帰ればメイド付きの豪邸で、よいものを食べられる。それで現地の人が仕事をしないと不満を言う。相手の状況を理解出来ない人が多くいました。日本人だけでなく、アメリカやヨーロッパ、いわゆる先進国の中にも多くいました。今でもいると私は思います。

しかし「武士道精神」の中には、そういう人と平等に付き合いたい、思いやりを持って接する価値観が昔からあります。海外で成功している日本人は、例外なくこういった価値観を持っておりま。

日本の経営とは何か

トヨタ自動車の例を挙げます。トヨタ自動車は、中国や東南アジアを始めとして世界中に拠点を持っています。我々が海外に出るときに一番大切にすることは、現地の従業員を大切にすること、現地の従業員と会話の機会を出来るだけ多く持つ、こういうことに尽きると思います。それぞれの国では、政治的、社会的、経済的な状況は異なっております。そして、な

んらかの問題を抱えているわけでありま。この現地の人の状況を理解し、現地の人との精神的なつながりを大事にする。これが日本の経営であると思います。日本の経営の内容としては「社長と社員の駐車場が平等で、社長と社員が同じ食堂で食事をしている」ことなどがよく本に書かれております。駐車場や食堂の問題などを取り上げて、日本の企業の経営と言われていることは、思い違いも甚だしいことであります。日本の経営とは、もっと精神的なところで日本企業と現地従業員が平等に接する。これを一番重要にしていることだと思えます。

柔道の試合では当然勝者と敗者がいます。しかし、勝った者はガッツポーズをしたり、負けたものに対し勝利を誇示したりすることを戒めていると思えます。これもまた、いわゆる「惻隠の情」だと思えます。柔道にしろ、空手道にしろ、絶対に喧嘩には自分の習得した技は使ってはならない、というルールがあります。弱者や貧困国から侮辱するために、自分たちのお金を使ってはならない。競争があるから経済は成長するのでありますので、私たちは経済における競争を否定することは出来ません。

経済も個人や企業、あるいは国のレベルでも敗者が出る。これは、仕方ないことです。大切なことは、敗者が復活するように出来るシステムを社会全体で築き上げることです。これは、政府や大企

業の仕事であると思っております。弱者に対し何回でも挑戦できるシステムを、国と国、個人と個人の関係、日本の中、そして世界でも作っていかなければならぬと思えます。

グローバルイズムを世界に押し広げた先進国への反発が世界各地で現在頻発しているテロや紛争の一因になっているというのには否定出来ないと思えます。こういう時代こそ日本は「惻隠の情」という武士道的価値観を世界に広げるために、働いていかなければと思えます。

リーダーに必要な死生観

「姿三四郎」では、総道館の三四郎は強いわけですから、次々に相手を倒していきます。こういった状況は、今の世界情勢に似ており、発展途上国はコテンパンにやられている状況にあると思えます。三四郎は柔道に勝ったときに、負けた相手の気持ちを思いやる事が出来、卑怯な手を使わない。負けた相手も彼と戦うことによって、彼の志を理解する。現在の先進国がこうした思いやりの心を持つことにより世界平和につながる。このような思想が広げられていくことが必要だと思えます。

国連などの主導の下で、もっとフェアに、会議や話し合いによって一つの世界を築くために頑張る。こういうことが世界平和のかたちではないかと思っております。

ります。国際社会では、人種や文化、年齢や性別の違いなど様々に違いを持つ人間がどう付き合っていくかが問題になっていきます。優越感や劣等感、それに差別意識を持つのではなく、対等な相手としてこれを理解すること。また、弱者や敗者に対し思いやりの心を持つことが私には必要ではないかと思えます。

もう一つ、武士の「死生観」が大事だと思えます。武士道の勇気というのは、正義のために命がけて生きるという勇気です。武士道精神とは「いかに死ぬか」ということでもあります。江戸時代に武士道精神を論じた山本常朝は「武士道とは死ぬこととみつけたり」という有名な言葉を残しました。いかに生き、いかに死ぬかという問いに対し「自分が正義と信じたことをやる時にはやる、やりつくした後で最後は死ねばいい」という覚悟を示しています。

現代を見てリーダーの素質で最も求められるものは、自分で世界の潮流や社会の変化を的確に把握、判断し、またスビード感を持って行動できることです。これは、政治家でも経営者、スポーツの世界でも同じであると思えます。リーダーに求められるものは、行動力に伴う決断力です。そして、これと深い関わりを持つのが死生観で「人間は必ずいつか死ぬものだ」という考えを持っているかどうかであると思えます。

会社で言いますと、社運をかけるプロ

ジエクトをやるかやらないか。この決断において、いろいろな情報があってもきりがありませぬ。最後にダメだったら自分が死ねばよいと思えるようになった時に、決断が出来るのです。その時に、経営者の判断を支えているのが、その人の「死生観」であると思います。部下は、上司の背中を見て付いて行くと言います。上司はいつも泰然自若としていなければならぬと思っております。どの様な時でも、こういう態度でいられる精神を作るのが「死生観」であると思います。私も、莫大な金額を投じて、海外に工場を作るような決断は、おいそれとは出来ませぬ。この時に、悩み抜くわけですが、最後には死ねばいいんだという覚悟に達しなければ、トップの決断は出来ないとはいえません。

昔の侍は、常に死ぬことを意識して生きていたわけです。いつ戦場に行けといわれるか分からない、切腹を命じられるか分からない。「姿三四郎」では三四郎と宿敵の松垣源之助との決闘があてはまっています。三四郎は「勝つことが出来るのだらうか？」と悩み抜きます。そして、最後に彼は、「死ぬ気でやればいいのだ」と思うわけです。悩み抜いた上で、最後に「死ねばよい」という境地に至っています。このことは、精一杯のことをやって出てくる結果は、実はなるようにしかならないと言っているのではないかと思えます。人間は必ず死にます。これを真剣

に考えた先に「どう生きていけばよいのか」があるのです。こういった考えは、私の潜在意識の中にあります。生死の関頭に立つ緊張感を持って過ごすことで、人生の充実感が生まれると思います。私の死生観に大きな影響を与えているのは、柔道であります。

日本人にとって死を考えることが、いつの間にか日常からかけ離れてしまいました。これは、非常に残念です。私が同世代の人に会って話すと、この業は良く効くとか、どこそこの病院は良いとか、いかに長生きをするかということを開くことがありまして、非常に寂しい気持ちになります。こういった人たちの話を聞いておりますと、人間はいつか死ぬものだということを忘れてしまっているように思います。

勝ったときが負けたとき

私は会社に入り、すぐトヨタ自動車で販売の神様といわれた神谷正太郎さんの部屋に入りました。部屋には仏様がたくさん置いてありました。「どうして、仏様が会社にとって大切なのですか」と、聞いたことがあります。神谷さんから「実は、経営者は孤独で、社長や会長になれば、それはもっと大きくなる。最後に、頼れるのは神仏になる。そこで、身近に仏像を置き判断に困った時はすがり付くようにしている」と聞きました。その時

は「何を言っているのだらう」と思いましたが、今考えてみるとそういう時が、私にもあったと思います。ですから、人間、天地自然のままに生きて死ぬということは非常に重要なことであると思っております。このような悟りは非常に重要だと思えます。

姿三四郎の中に出てくる有名な場面ですが、三四郎が町中で格闘して結道館に帰ってくる場面があります。師匠の矢野正五郎から、喧嘩は厳しく止められていたのですが、三四郎は悪漢を投げ飛ばし、自分の強さに酔い、快感を覚え、結道館に帰ってくるのです。

正五郎は、三四郎を呼び「お前の柔道は、所詮柔道ではなかった」と告げるのです。そして、「火の中にあっても、水の中にあっても、お前はたんたんと死ぬるのか」と三四郎に問いかけます。その問いに対し三四郎は「先生のためなら、今でも死ねます」と池に飛び込み一夜を過ごす場面があります。ここで、やり取りされる会話は、ただ闇雲に死ねばよいというのではなく、「死を知ることとは、生を知る」ということです。三四郎は「晩冷たい水に浸かり、師匠の言葉の意味を考えるのですが、結局その言葉の答えは、本の中にもはっきりと書いてはありませぬ。おそらく、著者自身もよく解らなかつたのではないかと思っております。私は、「勝ったときが負けたとき」だと言いました。社員を成めております。こん

なことをいいますと、評論家の方などは「あいつは馬鹿ではないか。勝った時は、どんどん攻めればよい」と言われます。正直に言いますと、トヨタ自動車は現在アメリカで勝っています。しかし、勝ったときが負けたときになる可能性が必ずあると社員を成めております。単純に勝った負けたという問題ではなく、勝ち方の問題というのが、世の中にはあるのです。

競争社会においては、ライバルの存在というのが必要です。ライバルが倒れた時に、二度と立ち上がれないほどに叩きのめすことは健全な競争ではないと思っております。

今更申し上げることはありませんが、リーダーたる者は、倫理に劣ることや不道徳なことが決してあつてはならないのです。

日本人が忘れた倫理観

経済を例に見ますと、市場主義を唱えたアダム・スミスの道徳情操論では倫理観の重要性を唱えています。私なりに解釈すると市場自由競争で勝敗を決するからこそ、そこに参加する個人の倫理観が問われることを、アダム・スミスは言いたかつたのではないかと思えます。金さえあればなんでも出来る考えは、尊敬されなければなくビジネス自体も長続き出来ないと考えます。

21世紀は、心の世紀と言われており、20世紀の日本には、特に第二次世界大戦後の状況は特徴的ですが、物質文明が繁栄、発達し、豊かさといえば、物の豊かさと考えられていました。しかし、こうした物質文明の繁栄は、人と人とのつながりの希薄化、倫理観の欠如という心の荒廃をもたらしてしまったことは明白です。我が国でも最近、日本人はバブル期の反省を忘れて、心の豊かさ、優しさよりも、金になることばかり追い求めていると、個人的に気になっていきます。最近の幼児や児童の殺傷事件、いじめ問題、あるいは企業による事故、不祥事などの様々な問題は、表面的には何の関係も無さそうに見えるのですが、日本人の心の変化という部分で関係しているように思います。

通産審議官だった天谷直弘さんという方が20年位前に書かれた『さらば、町人国家』という論文があります。彼のいう町人国家は、経済価値の追求、つまり、金儲けに先進して生きる国です。

彼は、戦後日本が食うに困らない国になるために、まずは町人国家としての生き方を唯一の選択肢として考え、それを実現したと言っています。実現後、「日本は国家としてこれで良いのだろうか」という疑問を持ちます。1980年代になつて「人が腹いっぱい食べられる段階で、なおパンを食べることしか考えられないのであれば、それは豚と大差ない」と

言いました。金持ちになったら、その段階で金もうけを超える価値を考えなければならぬと、彼は考えております。その価値とは、真と美というもので、なかでも日本人の場合はそのするどい感性で、誰の目にも認められる究極の価値観があり、それは美意識ではないかと考えました。本来は決して間違っていないかと思つた日本の経済成長は進んで行く中で物質と精神のバランスをどこかで大きく失つてしまったと述べています。

日本は、こうした心のアンバランスを修正する必要があるわけです。現在でも、それが求められていると思います。50歳以上の人たちは、私が今述べたような価値観や世界に親しんでいたと思います。しかし、戦後60年、私達の世界は日本独自の武士道的な精神を伝える努力を怠つてきたと思います。現在の日本には、自分さえよければ、勝ちさえすればよいという風潮がはびこっています。現在の若者には、このような考えが理解しやしいのかもしれない。しかし、これが現在の哲学のように捉えられることは非常に心配です。

21世紀の日本人は、自分たちを精神的に浄化していくことが大切だと思えます。それが、日本が世界で尊敬される道です。そのためにも教育を通じて、日本人本来の武士道精神を涵養して徹底していくことが大切であると思っております。

義務教育の終了までに、家庭、学校でしっかりとした倫理観を持つた人間を作り上げて欲しいと思っております。

次の世代に伝えるべき日本人の心

山下さんは、学校教育や子供の問題を解決するために、柔道を通じて人間作りをしていこうと「柔道ルネッサンス」の運動を熱心に推進しております。日本中の中学校に声をかけて、問題のある生徒を柔道場に呼んで、柔道で共に汗を流そうという考えです。これは、体を通じて武士道精神を伝える非常によい方法なのではないかと思えます。

山下さんは、小学生の時に大変な暴れん坊で、ご両親に近所の柔道場に連れて行かれたのがきっかけで柔道の楽しさにふれ、中学校で素晴らしい恩師に出会い、柔道の修行を通じて技を磨くとともに人間的にも成長された、うかがっています。今、いじめ問題が教育現場で解決出来ない状況ですが、柔道や空手道をやらせるのも一つの方法ではないかと思っております。

学校教育をここ数年で大きく変えていかなければならない。偏差値教育やこれまでのやり方を見直さなければならぬと思えます。捨てられ、無くなった大切なものがたくさんあります。日本人としての誇りを持つことや歴史や道徳、倫理、あるいは豊かな精神を育むことが

ほとんど扱われませんでした。これが、日本の教育現場を崩壊させたと思は思います。

人間の能力というのは、学校の勉強は不得意でも、ある分野では素晴らしい才能に恵まれているものです。単に、偏差値で人を計ることは出来ません。個性や能力を見ることが出来ません。個性や才能を伸ばすことは出来ません。子供の問題、教育の問題は、国の未来にとって非常に大きな問題です。山下さんのように、柔道を取り入れた様々な方法、可能性を探っていかねばならないと思えます。

グローバル社会に生きる子供たちに、日本の歴史や伝統、文化をもっと知ってもらいたいし、日本人としての誇りを持つて世界の中で活躍して欲しいと思っております。

最後になりましたが、山下さんとの交流を通じまして、今の時代に、これほどまでに潔く情熱に溢れて、そして、清しい心持の日本人がいるということに非常に大きな喜びを覚えております。このNPO法人柔道教育ソリダリティーの活動を通して、一人でも多くの日本人が、本来の日本人の心を取り戻して頂ければ、日本の柔道を愛し応援する者としてこれ以上の幸せはないと思っております。NPO法人の活動がいつそう発展することを祈念いたしまして、私の話しを終わらせていただきます。